

早稲田大学アジア太平洋研究センター・国際開発協力研究部会
第 7 回研究部会・記録

日時：2008 年 12 月 17 日（水）18:30-20:20

会場：早稲田大学 19 号館（西早稲田ビル）501 教室

参加者（敬称略）：柳原透（拓殖大学）・田中勝也（滋賀大学）・松本礼史（日本大学）・中村洋（地球・人間環境フォーラム）・岡安智生（東京大学）・加藤 宏（JICA）・高瀬浩一（早稲田大学）・又地淳（JICA）・松岡俊二（早稲田大学）

記録：岩本英和（早稲田大学 D2）

報告者：柳原 透（拓殖大学）「キャパシティ・ディベロップメント研究の課題：開発経済からの視点」

報告概要

本報告のテーマは、「キャパシティ・ディベロップメント研究の課題」である。副題の「開発経済学からの視点」という方面が十分なことできていないため、そこは時間が許す限り、皆様からのご指摘・コメントを頂く中で議論させていただければと思っている。そこで、本報告では CD に関する論文を書くなら、論として通常の見取り図に即した場合にどうすれば論文になりそうなのかということを試みた。

1 番目が Motivation、2 番目は、Definition、3 番目は Positioning、4 番目は Framing、5 番目は Articulation とある。私の印象では、3 番目の Positioning が弱いのではないかと考えている。4 番目の Framing は、その問いとして、一体どういうことに答えを出すのか。答えを出すにあたって、どういうアプローチをとるのかなどが不明確である。私自身は、この 5 番目の Articulation に関して、とても気に入っている。

1 番目の Motivation だが、JICA の考え方では、(2) の“The concept of Capacity Development provides a useful framework for improving the management of programs/projects.”である。しかし、開発経済学では開発 (development) を考えると、おそらく入り方は (1) の “Capacity is a critical determinant of socioeconomic conditions.”である。私自身どちらかを取るとすれば、(1) の方を取る。これは相互に矛盾するというわけではないし、扱う対象として重なり合うところがある。この 2 つを明確にすると言うことは、両側からの発想をする研究者にとって意義のあることだろうと思う。このあたりは皆様のお考えを伺いたいと思います。

2 番目の Definition に関しては、かなりの修正を加えている。これが UNDP の定義だとし、JICA の『CD ハンドブック』が掲げているものです。これは読み方・解釈で、幅がありうるが、“ability to perform”のところ、つまり、これを Capacity だと言ってしまうと縦系列が不明確になる。私自身は Capacity と Performance を峻別する立場です。そうしないと縦系列ってというのは存在しない。Potential が Practice として実地の中で実施され、それがあ

結果を生む。それを評価して Performance という。この 3 段階を峻別すべきではないかという印象がある。このような立場から、Capacity というのは inner potentiality である。

3 番目の Positioning としては、見取り図をどう描くかで Capacity をどう解釈するのかを決定している。この項目にエンパワーメントを入れてもいいのかもしれない。

4 番目の Framing としてはどのような問いをたてるのか。(1)の“Capacity is a critical determinant of socioeconomic conditions.”の方の問題関心に即している。(2)の“The concept of Capacity Development provides a useful framework for improving the management of programs/projects.”だと、おそらく違った問いのたて方になるのであろう。

1 つは、Capacity というのが Development にどう貢献するのか。これは先程の縦方向ということである。Capacity とは、Potential であり、それが Practice においてどれだけ使用されるのかという要素 (Factor) を明示しなくてはならない。もう 1 つはおそらく”How is capacity enforced ”ということである。

5 番目の Articulation に関していくつかコメントがある。ここでは、Individual、Organization、Society の 3 層となっているが、Society に偏りすぎているのではないか。さらに次のステップとして、organization がなくて、individual と society が直接関わるのはいくらかでもあるのではないか。この 3 層というのがあまり強くしてしまうと、かえって縛りをかけてしまう。実証研究においてはもうキャパシティという用語は使わずに Element 単位の言葉で述べていく。タイトルで Capacity という言葉は入ってもいいが、本文では Capacity という言葉はもうでてこないというくらいのつもりで使っていけばよいのではないか。

能力に関する先行研究には、①生産関数/成長会計(product function/ growth accounting)、②能力分布 (X-efficiency)、③投資関数(investment function)、④学習効果(Learning by Doing)、④ペンローズ理論(Penrose effect)、⑤吸収能力(Absorptive Capacity)などがある。

質疑応答

松岡

柳原さんには、2008 年 7 月に開かれた国際開発セミナーの議論を通して、全体的な議論をしてほしいとの依頼をした。本報告では UNDP や JICA が展開してきた議論が対象となっている。私自身は、UNDP/JICA 流の Capacity の定義とは少し変えている部分があるし、能力と制度を別のものとして取扱い、能力形成と制度変化という研究を行っている。そこで、今回の研究会では、柳原さんに指摘していただいた点を議論できたらと思う。

加藤

柳原さんの報告を聞いて共感するところは、キャパシティというのは分解(decompose)し、要素に還元した部分で扱うということです。JICA の中では開発というとプロジェクトと同義であるが、それが成功するかしないかと言うのはいろいろなファクターがある組み合わせによって結びついたときに起こると理解している。技術的要素、経済的要素、社会的要素が考えられるがどれか一つでも抜けていたらうまくいかないことが観察されている。経験的な議論ではあるが、それらが相互作用したプロジェクトはうまくいき、それを成し得

た組織はキャパシティがあるとみなされる。内実・中味に 1 段・2 段下りていかないとキャパシティは捉えどころのない議論になってしまう。

松岡

研究として CD を進めていく場合に、柳原さんがやられてきたような開発経済学の視点から考察した場合、報告であげられた 5 項目で考えるべきなのか？課題と考えられているところは、Articulation ということなののでしょうか？

柳原

課題というか先ほど申し上げたように、私自身が気に入っているということがある。Articulation の定義は多少修正しているところはあるが、それは Definition で修正したところと同じである。Articulation の設定で捉えられていることは、私は適切であろうと思う。ただし、研究として進める場合、他の重要な問題要因との相互関係というのを Positioning として明確に示した方がよいと思う。提示した 5 項目を吟味しながら自分の研究の設定を定めていければ良いのではないか。

加藤

キャパシティというのは、直接的には計測できないということが根底にあるのか？

柳原

あります。

松岡

ポテンシャルでキャパシティを捉えるというのは、自明のことではないか。例えば、環境分野に関して言えば、キャリング・キャパシティなども自然の潜在能力を測るためのもので、それをどれだけ使うのかということがパフォーマンスとして表されている。

柳原

私の見解では、キャパシティとは、アクター間の相互関係しか言及していないと考えている。

松岡

元々、西洋の技術や知識を途上国に単純に導入したとしてもうまく機能しなかったという事実が開発におけるキャパシティの議論の出発点となっている。そのため、その地域社会が持っているキャパシティに注目することとなった。これまでは、キャパシティに焦点を当ててみていなかったのが、途上国社会が持っているキャパシティに焦点を当ててみたらどのようなことが描けるのかということが背景にあったはず。UNDP が提唱した概念（キャパシティ）は、何でも言えるような巨大な概念になっている。キャパシティ・ディベロップメントについて 15 年ぐらい議論をしているので、そろそろ具体的にどうするのかという議論をしないといけない。新しい議論をしなくてはならない。

高瀬

私も柳原さんと同じように分類して分析している。私の場合、元々あるデータを CD に関係するような形でまとめて、7 月の CD 会議で報告した。柳原さんのまとめ方は一つのまとめ方としてあると思うが、問題は human assessment のキャパシティと labor のキャパシティ

との違いがはっきりしないという点ではないか。基本的に ODA の援助支出にキャパシティに関連しないものはあるのか。

松岡

もし、CD からポジティブなインプリケーションを得るのであれば、単位当たりの援助資源投入規模は大きくすべきだし、援助期間を長くすべきだと思う。小さいプロジェクトを多くやるよりも各プロジェクトを統合させる方が結果として CD につながるのではないか。

加藤

いま指摘された点は、7 月の会議でも教育部門で発表されたし、現在、JICA でも検討されている。

又地

アビリティをあえて inner potential とした意義というのは、ポテンシャルという潜在しているものが実施（プラクティス）されることによって、パフォーマンスに変わるということでしょうか？

柳原

私が指摘している点は、縦系列を意識しないで書いてしまっていることが問題であるということである。

又地

プラクティスに焦点をおくことが大事だと言われましたが、ガバナンス＝プラクティスを指しているということでしょうか？

柳原

ガバナンスとして括られる要因の中での特定のプラクティスがどのように機能し、utilization に効果をもたらすのか。これは開発経済学の観点から研究を行うことが十分可能だと思う。

松本

累積効果というお話がありましたが、時間というものをキャパシティの議論の中で考える場合、どのような方法で分析するのか。

柳原

私自身は、時間要素に高い関心を持っている。

田中

実証研究で能力を分析する場合に、ストック的な能力とフロー的な能力をセットで測るべきなのか。

柳原

私は、縦系列にこだわるべきだと主張しているためこのような立場を取っている。

中村

7 月のセミナーの際に佐藤先生が言われていたことに大変関心があり、実務的にみるとエンパワーメントという言葉が使われているが、CD の定義をどう位置づけているのか。定義をみると非常に広く、一般の人に伝えるときに CD を使っているのか。CD を使う意義がま

だ分らない。CD を使う利点とは？

柳原

研究の入り口では CD という言葉はあってもいいと思うが、研究をする際には CD の要素に対して焦点を当てるべきだと思う。

加藤

1990 年代に開発援助分野から CD がでてきた。今は文脈が変わってきて、途上国のオーナーシップをやらなくては行けないという文脈で CD が使用されている。援助体制を示すために CD は使われている。実務家の間では流行言葉になっている。

松岡

実務家にとって自分達の成果をなんらかの言葉で示す際に、広い概念である CD を日常語として用いている。CD という言葉が、国際開発研究においていかにイノベーティブに用いられるかは今後の課題である。

次回の研究部会の予定

第 8 回研究部会：2009 年 2 月 18 日（水）、18:30-20:00、早稲田大学西早稲ビル

報告予定者：恒川恵市（JICA 研究所長）

報告テーマ：「JICA の CD 調査研究および JICA 研究所の調査研究活動について」

以上